道のりは、遠くとも……

先にＨＰで「筋ジスの長女殺害した父親に温情判決」、「障害のある我が子と無理心中？の報道に接して」（バックナンバーレポート関係Ｐ 2003.12：現代社会の障害児観の一面の検証：参照）で、親による障害のある我が子との心中の悲惨な事件に触れた。

この件で、色んな所で何人かの親と話した。「何度か心中を考えたことが…」、「自分も同じことをするかも…」、「子どもをおいて自分は先に逝けない…」という心情の本音部分を、聞かせていただいた。そこまで思い詰めた心境で子育てさせてる現在の福祉社会のあり方とは、どうしたものかという大きな問題はある。

一方、社会が障害児・者や家族の支援策をあれこれ検討・具体化していったところで、究極的に親が「子どもより先に逝けない」と考えながら日常を過ごしているとしたら、障害児・者の生存権を守ることはできないということにもなりかねない。この辺も話題にしたが、「親の心境は、障害児をもつ経験のない人には理解できない」という。もちろんそうであろうが…。

「自分が先に逝ってもいいと思える社会をお互いが意見の異なりを認めた上で、乗り越え知恵を出し合おうという姿勢が、お互いに必要でないか」とも話しが、「今は、そうした社会環境でないので、残して先には…」という。こうした応答になると、「じゃあ、親として社会に福祉支援策をあれこれ要望しているのは、何を考えてのことか」、また「福祉支援策は支援策。親の心情は別問題！ということか」と聞きたかったが…。

障害があろうがなかろうか、「生命尊重」という次元の内容の論まで進みたかったが、「今の社会環境では…」の言葉を聞くと、社会環境が十分でないだけに、私としてもつい口よどんでしまう。

人間存在の究極的・根源的、かつ普遍的な「生命尊重」のその内容の問題の議論を抜きにした、社会の全ての分野でのあり方の検証はあり得るのであろうかと考える自分だけに、いつか親ときたんなく意見交換をしたい。

また、親に「先に逝けない」という想いから、一歩も二歩も踏み出して欲しいと願うのは、いつの時代にも親にはごくな話なのであろうか。共通体験がない限り、共有できる目標は持てないのであろうか。

道のりは長いようだが、親にも社会にも、そして自分にも、「共に生きる」という内容を問い続けて行きたい。

（2004 年 01 月 22 日　記）